

燕石
十種

寛天見聞記

五輯

六

借
679
49



寛天見聞記



此度の御政令もさうも有らう。享保寛政の如く觸れて士農工商衣食住の分限を弁へ儉約を要らう。身を巧むるべき事仰せ流さう。いとも流す。や貴賤とも妻子を以て心よる。おごり小長下家をたし。身を失ふも己の好む事と出を新妻よる慎を崩を極ふる。予幼少の頃、町家の女子供乃前ふれといふものを緝る。その木綿へ白糸あて。山道ふ。継。あまの流りせ。享和の政よ。さんとめとな。三布。い。て。う。ら。あ。ま。の。流。り。せ。今。せ。う。う。流。り。一。價。の。高。き。を。い。と。ま。を。残。つ。の。き。編。緬。の。衿。を。と。用。る。も。有。一。下。駄。を。履。の。も。あ。を。も。塗。革。を。最。上。と。一。竹。の。皮。を。よ。り。一。緒。を。黒。と。赤。と。ふ。塗。し。ふ。と。も。有。一。あ。ま。の。享。和。の。政。よ。う。や。わ。る。馬。と。一。革。鼻。緒。を。

用いしより縮のき固まると天我織紋革層革など用了
松ふあきし一享和の匠女のしけゆひききとて板下の縮緬を
價十丈より百廻くらゐり切て賣しは法度ふたつそは縮
緬紙とてあまの多る紙の粉色の模映あつるらうしき紙を
替ゆひしと固舎之の離の幕ふ用ひきき今縮緬の鬼紋を
あつて價百文の胎もきし寛政の初めの女髪結とてその
稀ある堺町近道の之光新道より駄屋のお政とて髪結所
百廻を結し今敷多きあつて縮緬を結しも有とて寛
政十一年三圍縮緬の用帳群集して日本橋白木屋の奉納
少と天我織の牛黒木賣の人形も虎の皮を作る多る
虎の眼爪の金物を用のそおし飾り物あり是用帳のそ
里物小美を屋と此初めなる紙をり可ふ虎八千里の紙を
えしきふ障る紙とてあつるなむいしきもは付ありき又享和

年洲子新堀の移り立花屋の由屋敷内ふち帯縮緬とて多
群集り其本新守西門の前通り今石坂あり川端を通
りし為りされを流し舟小新堀のつき常を扱も賑ふち舟
里の由利生いあつていしはし業もふ寛政十年小川へ
鯨上りしはし町家の者あつて小由控を破り驕り小長し多
里前ふし如く流し己が物をあつてあつた衣食位の外限
を忘て縮る金箔不融面とてなる也文化三年四月堂言
臨ふ由火しと南風をよしし洲子新守折を新造様より改
時市中へ由解もて食おの商人とも町年暮後所へ増減方出を
との事とて是より株といふもなす是は食物商人漸く小増
きしなあつてそは伊勢町の河岸へ米相場の會所を新ひ五
建り是は正米の所として空米の相場也俗ふちたんとし
橋頭事あり十廻と云株も出来そは流株といふも近きあり

文化三年三月
四ナリ

おの谷中感應寺目黒不動湯島天神寺富興寺河原庄
江戸中の諸社諸堂の惣領をトす一月廿四五會程にて
室初ハ富の出番とて賣り止む是を停止せらるる後ハ
おの谷中一とて一の富の番の書付を賣りし事市中
堅横敷十人ふ及び是ハ富の札を買取る者の為なり此附
とて一の富を賣りし一階二階を儲け一文を八文にして
ある割合あり大欲の輩ハ大金を儲けし者も法欲の心を
要し中一といふ一均所の大田谷中目黒湯島諸寺ハ幡曰
飲食曰三社曰念佛堂曰右神宮曰熾魔堂曰園子天王曰
弁天曰所回院深川灵巖寺新川右神宮芝神明堂定心山西名保
八幡麻布東徳寺本願町白旗稲荷村の森稲荷下谷六所河原
白山権現護国寺根津権現平川天冲茅場町藥師品川天王同庚
申堂是等を均所とて月並或之會の所も四寺ハ初め

△おの谷中
おの谷中一とて一の富の番の書付を賣りし事市中

東福寺上野末公
中建立の手も東
工上様ありし
麻布中無因あり

札の代きん者も金の次第不同五十ある千あるは方々
毎寺社有り所々檢使ありて立所ハ事也此檢使の奴僕地
中川前極く遠を賣り富見物の者共と贈賣する者幾處も
く見物賣札賣おの谷中買の見物付あり者見物群
集する事おび多しはさう此時ハ取の末天保の初めを愚
疑此輩一財ハ大金を得る者を極んるをいふとも士農
工商己が業を勤め功を積りて家をも富もなきハ何ぞそ
業を懈怠し天福を得る事何ん大富も賃懐て入る付
も又懐くも何懐く俗云さうもすすも無理を云
也無理ハ仁徳を得る時又無理ハ仁徳を失くすハ何の戒ありん

享和の以河字と谷と一此向八百善といふ料理茶屋流り
と海川と橋と平清大寺とある田川屋是あり文化の流り流り
と料理屋と或人の此酒も飲きたりといふやある善流り極
上の茶を煎りてさして香の物を茶漬をよらんといふ善
お連れハる善流り此茶漬飯をいふといふ善一お替り此
と一と半日をいふもささしてやういふかやくの香のものと花
花れと瓶をいふり此香の物を香れ此といふ極上品
煎り此茶漬を切交ふあるといふ扱食おきりて價をきくか金
をいふかありといふ客人興さめいふか極上品香の物をいふと
煎り此茶漬と一とを亭に香を香の物の代ハともかくも茶
の代こそささるあるといふ茶極上の茶といふも一とお瓶へ半斤ハ入ら
ると茶ふ合ある水といふたきた西川此水を汲ふ人ををら
しあり此水を移せきりて早稲所此水を五文也此運賃

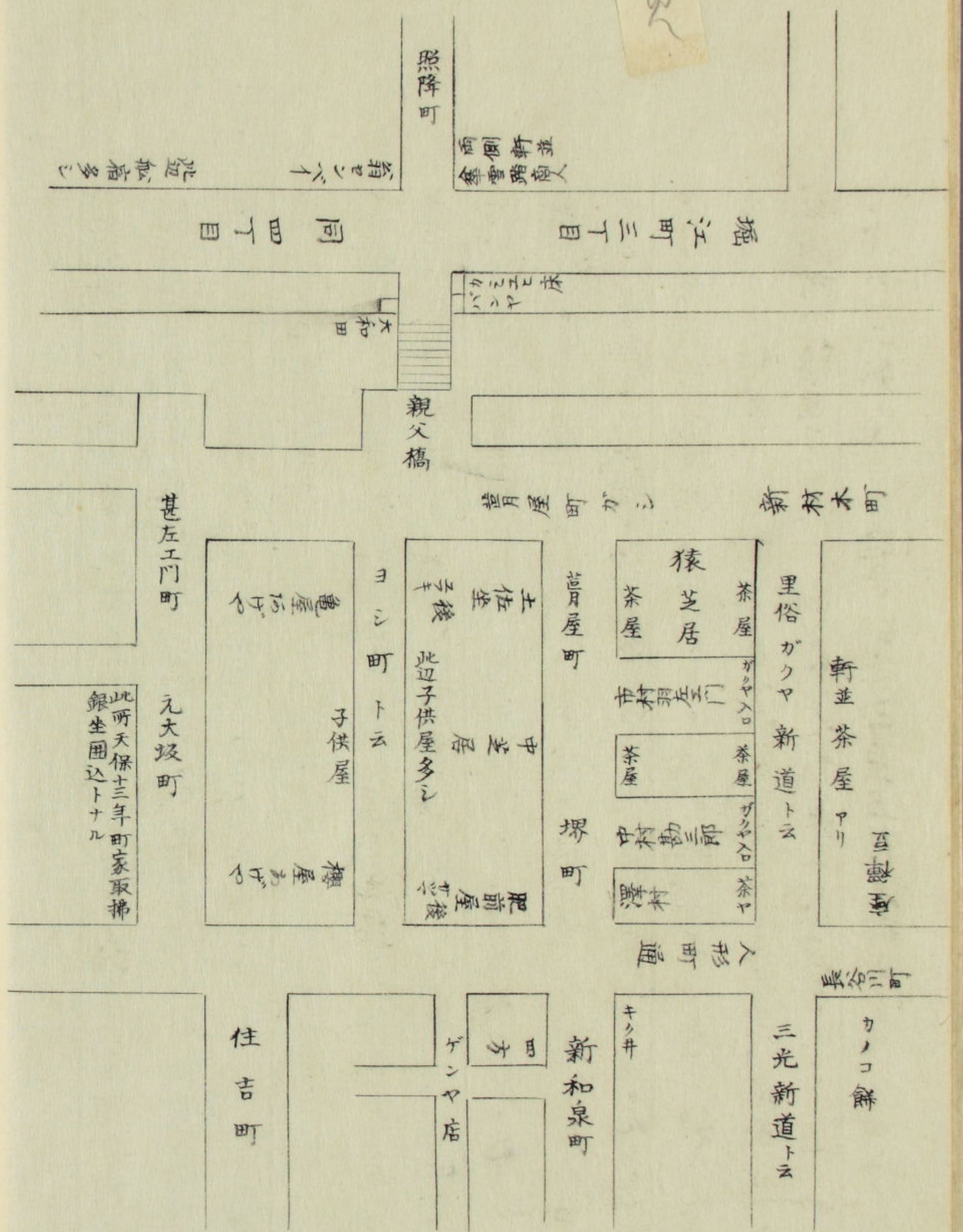
莫大也といふり此茶をいふ流りして客を招て煎茶を煎
瓶をいふ客も茶の流り水のお所を香といふ是ハ玉川ハ是ハ
隅田川是ハ河東の井の水といふをいふを賞美あり茶の口ハ
船橋を織江がよし極上品といふ極上品八百善の此も香の物
いふ茶漬ありといふか家も有べきを料理屋いふて茶漬あり
無量の金銭を捨てる事戒むべし予知か此酒の器を鉄瓶
子塗器ハ限りたり極上品をいふの此より極上品の陶
器といふ器ハ猪口と愛し酒をいふ器でなるも此器ハぬあ
ぬい香何らいといふ井ハ水を入猪口数多浮めて酒の樂とい
善流り此器ハ四とりも井となり箸のふとさハ善流り此器ありと
煎りといふ細き杉箸を用い天麩羅若菜ハ煎りて皆
煎りて仕出しして茶物煮よるといふて此の流り此の流り
只目をよめある事いふり此費のいふ此食物を無量の

とくり精製してその品の味を失ひしを賞讃するもの笑ふ
べし耳も正名を引きしを戲する事をぬり今の歌一
とて後一咄一とく者ハ寛政の以ハ稀少ありし
横馬又ハ河原河原夢樂杯云者けりなりし
多て歌なり咄一とくその付ハ今の宗ヨシと云場ハ定中ハ
店休の以或所ハちの茶屋の二階又ハ廣き
傍あり咄一とく也一宗と云所ハあき
此地古所又ハ明店ハ親譲を今ハ或所内ハ二
とを号し看板ハ仍燈をけ咄一ハ
名物ハ似娘と云ハ八人落浮世ぶ一
業もあ一人ヨシをの業と云ハ家ハあり
悪の中意を失ひ女子の心を惑ヨシふの
とも昔ハ赤本馬車と云表紙を赤又馬
として新光四天王と云武者繪ハ少
の黄の表紙ハ桃衣布花咲ぢ古き
勸善懲惡の心を述べて童弄と云一
種ハの作を顯し文化ハ合ヨシと云ハ
齋など巧を畫一連年出版ヨシハ
をを号とせ一と云ハ之店ハ風俗を
多て居の程ハと云ハ昔と今とを思
顔見世程ハ暫ハは細ハと云ハ善ハ
幕ハして女童ハと云ハ今ハ程ハは
用ハ流ハを巧と云ハ女童ハハ身持
一ハ前ハ云ハ今ハハハハハハハハハ

北蔵公合卷の異極下
を初を黄紙ハハハハハハハハハ

して新光四天王と云武者繪ハ少
の黄の表紙ハ桃衣布花咲ぢ古き
勸善懲惡の心を述べて童弄と云一
種ハの作を顯し文化ハ合ヨシと云ハ
齋など巧を畫一連年出版ヨシハ
をを号とせ一と云ハ之店ハ風俗を
多て居の程ハと云ハ昔と今とを思
顔見世程ハ暫ハは細ハと云ハ善ハ
幕ハして女童ハと云ハ今ハ程ハは
用ハ流ハを巧と云ハ女童ハハ身持
一ハ前ハ云ハ今ハハハハハハハハハ

右の圖をみると寛政年中の繪圖ありて此菅原町市村坐の
 都内とありて堀町中村屋の相長桐とありて中の芝居ありて
 倍程又ハ竹田大ららる或ハ曲馬能程言ふと絶を有能お
 座あり佐々木佐々木何れも名譽のをまゝてよふ張る合
 て操人形降り出後寛政六七年迄佐佐木佐佐木佐佐木
 忠臣翁十二降つき幕を大仕掛を初て興ひきり河原の芝
 居ハ猿程言をせらるるおそれおそれしき物を見せ物とをる
 妻早業お何れもあまのこを張り芝居の目新和泉町
 小芝居店と云大裏町是ハ昔ハ医師岡本云治亮の御領せ
 る所為と云横屋とい通るも路次者此處小後者芝居
 者多く住居を別四方と云酒屋の本家の裏なる人形町ハ長
 谷川町の横面をいふ家毎ハ人形細工人何れしハ遊小減し
 て今ハ一二軒とあり近き以近三月五月人形市立ハ今も絶



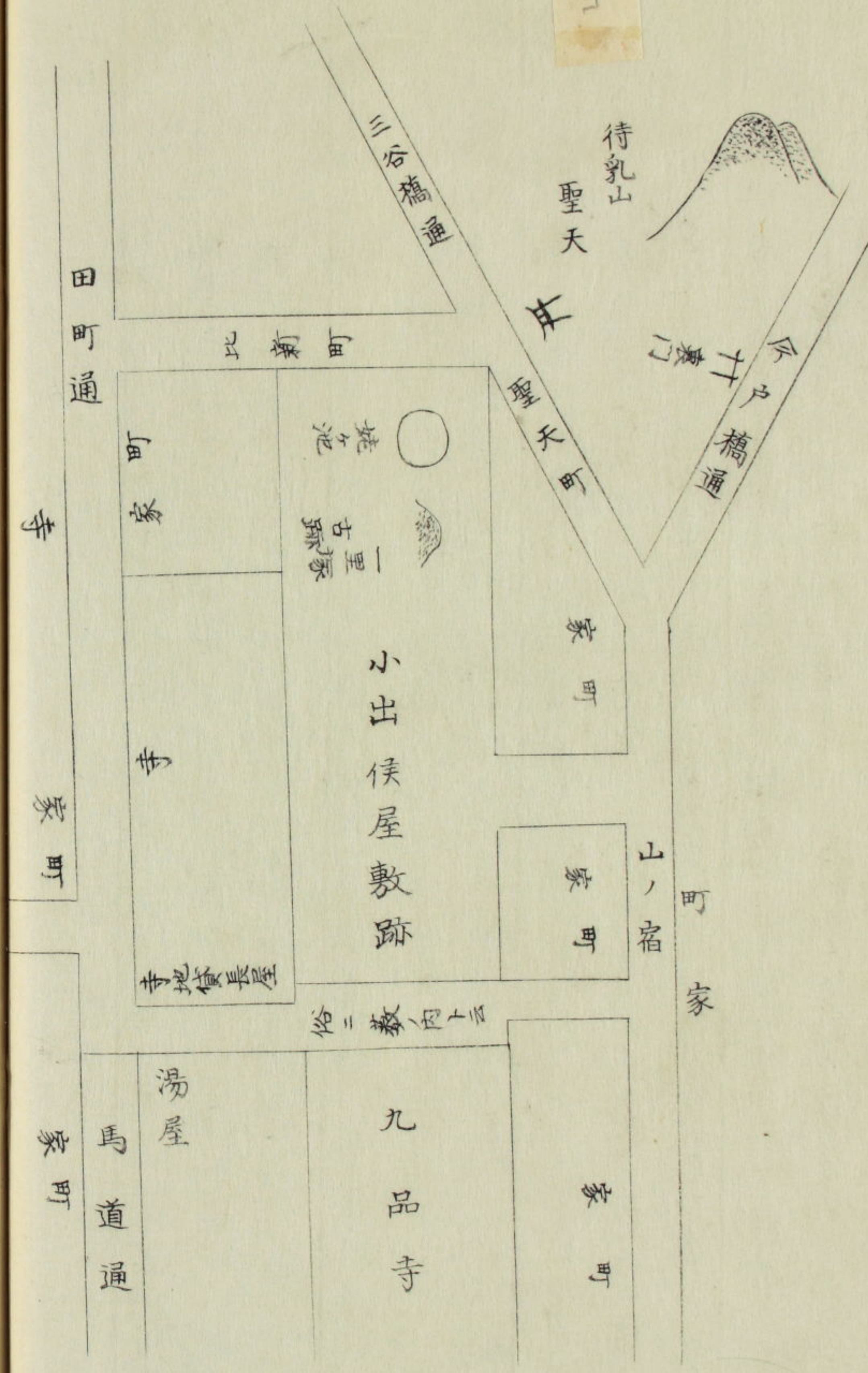
一頁

てあり又寛政の末やではあつたし音と云從者の家少く麻
子餅を賣り見世先の四尺をうけ坊主小僧の人形袖ありし
羽織を忌み一葉巻の上一昨の皮包を造るるを拵て立居り
餅買人の来る付は人形おのれと拵ゆるんまのからりきし
は考八を俳名を和考と云て及化の名人とて元禄十三年四月
五人男の狂ふふ布袋市太夫をせし時其長谷川所小徳川去章
と云佛画師有て此似顔を画せ出板を是似顔画の始ありと聞
傳ふ去章其付壺の印を押せし去章を世ふ壺と唱へし
拵又大昔に今此長谷川所を稱宣所と云し此は去も去居道
と地意物所の直側ふ去との職人形を並居しが是も今も去
か少少も去芳町ふかげまやとて男色を去賣り野良屋の役
者の身子を公人法衣を拵ゆるし子供を拵ゆるし拵ゆる
ハ料理茶屋を去別家なを價一切百足壺に分取分也野良

十八九より藝者少くと云又去居の女形の從者ハ平日人数
少く由殿場の狂言或ハ由煙草の行列拵ゆる女形多くハ用
ある付は野良を履ひ女形を去ありし時野良振袖を忌し
編笠をりわり樂屋に入る天町の始ありしと云新材亦所の
河岸ハ煙草の物つくり作目を改め煙草の市より去を烟
草河岸といひしが是も今も繞りる菊井松本沢村より居皆
古き杉木油見せたりと云此地の名物長谷川所拵ゆる人
ぶ源氏茶漬人形所拵ゆる新和泉所拵ゆる虎巻のまんぢう
去より由餅買人の賣餅壺を漢雪豆腐是亦ハ古き賣
人なる人形所拵ゆる側女見世の巻巻形を拵ゆる皆合物斗
子なりし小天保十二年十月六日の歌舞所拵ゆる出火して昔
屋町遊藝を同十二年二月堺町遊藝所を以てらハ遊藝の
心小出屋の巻巻形を下す是町名を様若町と改めせらる

天保十二年十月七日晩七時堺町より出火由芝居近辺煙草屋芝居普請止し同月十八日由芝居并煙草屋其外枝者茶屋共引掛り上命命セラレ木挽町坐主煙失又ハ大破り前退り引掛り命セラレ明九十二年正月十二日小出伊勢屋下邸一万七千八百坪ヲ替り地二下サル同月十六日河原崎座モ引移ルハ上モ新地永代祇下上三坐并芝居廿茶屋其外者金八十三百五十兩下り愛ニ無用の事ナラシム

一卜廓の芝居町として役者芝居の者共此廓の中へ住居をべし
令せらる



此時より役者化へ出る折少あるを冠を継来り本控所の
河原壽、翌年四年の春此地へ引移り元大坂町の東側へは時辰
田んぼなるやうに小出侯の屋敷の麓に感応寺の跡地を賜りし
とせ川柳 与り

芝居町 図で合符が神をり

ちのころあれ乳母をあれ住子出

前小園なる芝居町と後小野と申すの源川そかの料理茶屋水
茶屋やうに宿場の飯盛女と吉原町とをさうして悪不坊とを悪不
と申すの近よきまきまきと申すは皆免を事國の
金銀融通あるべきを身のみ限をこそこれ悪不坊にて酒會ふ長
し無益の奢ふ金銀を費しそ身は融通と申す又ふ名を
成事教くべきのふくす三味流流者云々巧きて源川仲町
芝居橋云々及を武丁所至薬研堀柳云々如所石河の新道

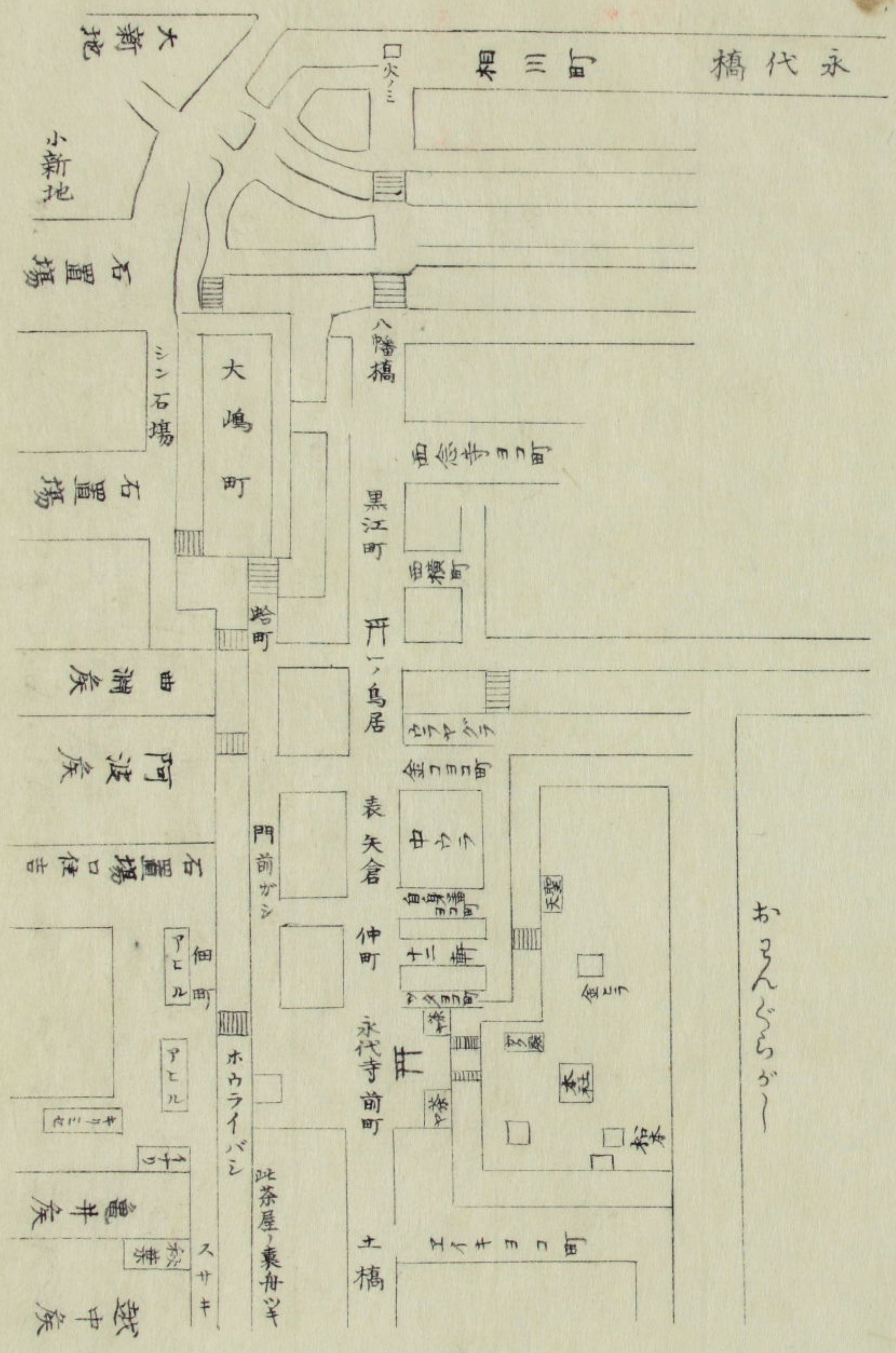
浅草仲町や谷原少路湯島天神のまき玉珠のあそびあそびは
居してやうき風俗の装束も女招きふ店して酒席ふ切て
酌をとり流し歌とも好色あそびを三味線ふ合をうらひあそび
人をもあそびをも又水茶屋の女料理茶屋の娘分振すおもしろ
借るあそびの幽室ふ籠り地獄といふ女も有り洋ふあそびを

ころんころんころんころんころんころんころんころんころん
此歌を考ふべし歎ふはさしむる石田先生此は短歌
こゝい化りの何れぞとおひ。毫と短氣と虚と酒と者お持こつ
あむ

我をききと実ふ恋ぞと思ひころんころんころんころんころん
うと何人の福せしと理も也然るふ天保十三年三月十四日浅草の
堂あそびあそび切見世といふ賭志き娼婦を捕へらるしおもしろ
令りて江戸中の料理茶屋ふ隠し賣女と云事を後世とせし

天保三年二月の下の寄世
浅草仲町や谷原少路湯島天神のまき玉珠のあそびあそびは
居してやうき風俗の装束も女招きふ店して酒席ふ切て
酌をとり流し歌とも好色あそびを三味線ふ合をうらひあそび
人をもあそびをも又水茶屋の女料理茶屋の娘分振すおもしろ
借るあそびの幽室ふ籠り地獄といふ女も有り洋ふあそびを
ころんころんころんころんころんころんころんころんころん
此歌を考ふべし歎ふはさしむる石田先生此は短歌
こゝい化りの何れぞとおひ。毫と短氣と虚と酒と者お持こつ
あむ

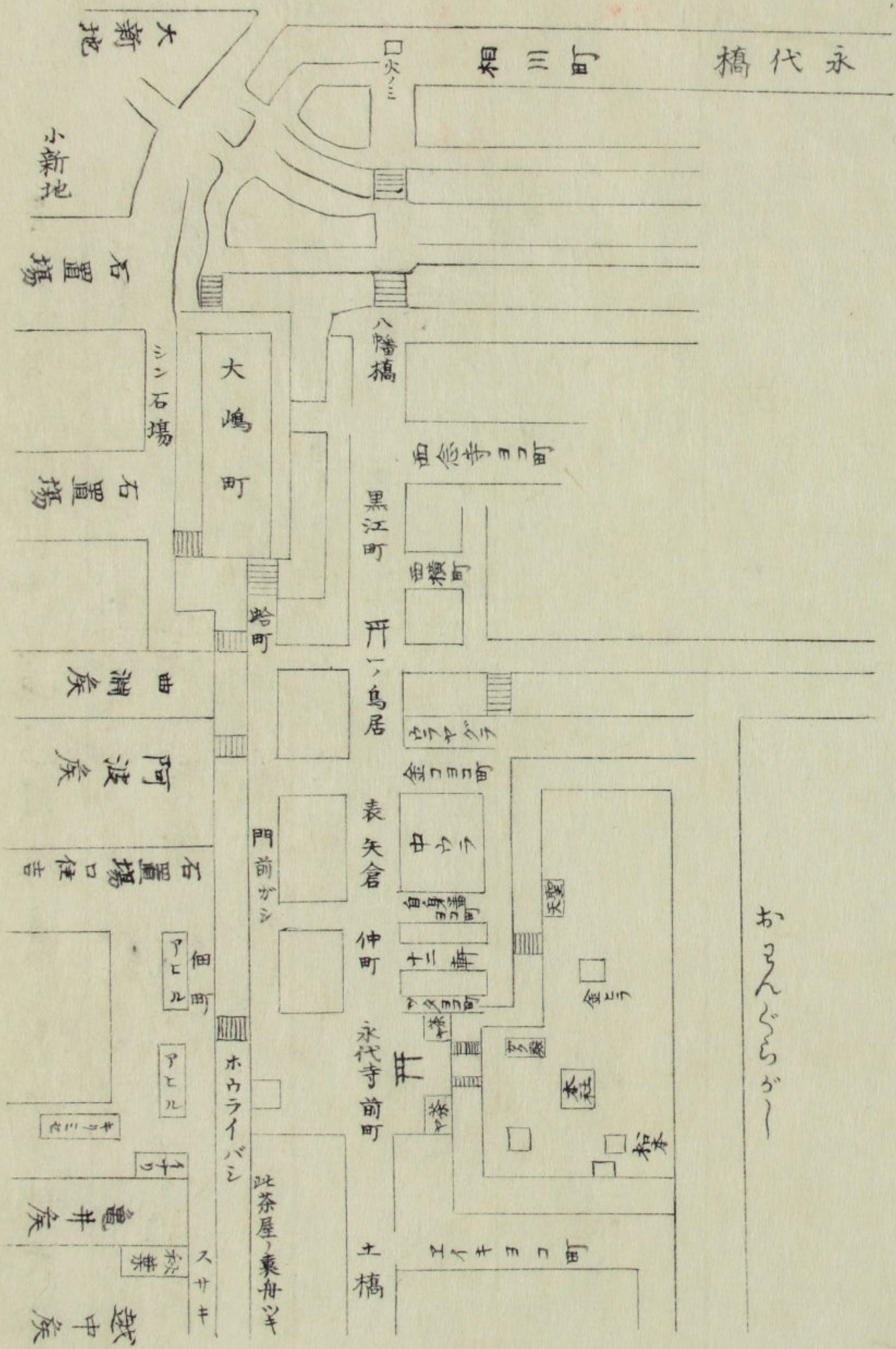
者とも同年八月迄の高賣を改むし一任家をも外の如く移さし
まき吉原町へ移さし極如處とあだんす心のあつたさし是迄抱直
し女も吉原町へ移さし極如處とあだんす心のあつたさし是迄抱直
せらるかの料理茶屋のものとし押仁あつた有るき事をあそび生堂
を改めて四民の中へ入るもとせし吉原町へ入てくらしやあそびも
志をふつと改令も一宗もあつた芝居のふいあふ奉り寄
せ場所江戸中の十五軒ふ数を定め娘淨瑠璃女藝弦地獄の
歌を林市一情爽の諸婦員もきびし内外の何れ役者婦
女もあつた風俗を乱れ給ふ或は店石燈籠所植の草
木世上の花美あつた事をさしめ小町の弄物も價賤八百文銀を
きあつたあそびを林市一儉約價素正直ふ家業も精し賣物
の價もこれの月並満色の價も地代店賃もあつたを
あし家越し小店振賣といふあそびも改家との者控代



天保三年三月十六日
 深川六郎本所三平
 其外惣所場トモ千
 五所同年八月迄三取
 拵令せらる

大鴨
 後茶
 畧十此シ

を五へうらひ念佛儀題目様あり者仲弓梵天抄を
 べて仲間といふ名様式といふ名自立當うらひ昔より
 御製禁をし金銀細工器甲の敷隠し並うらひをい
 取上ヶうらひを野菓物の敷時節よらひ初物
 せりして奉りていふと令せらる是所の
 御仁政の御改革難をいふも御り所り恐るはし
 あぢらんや前小述多うらひ戸中の新理をいふ隠し賣
 女を並一場所を五拂ひとなりし大鴨概カ所カを下り志
 りをいふ只も前車の反意をとて後車の戒とあり
 舞がぬなり



天保三年三月十日
 深川六ヶ所本町三軒
 其外惣所場トモ三軒
 六所同年八月迄三取
 拵令せらる

大鴨
 後葉
 畧十此ニ

を五へうらひ念佛漢題目儀あり者仲呂梵天抄を
 べて仲間といふ名株式といふ名自立當うらひ昔より
 御製禁をいし金銀細工器甲の敷徳一並うらひをい
 取上ヶうらひなま野菓物の敷時節よまき初物
 せりひて奉りおきと令せらる是所の
 御仁政の御改革難をいしとる銀り所り恐を法し
 おぢらんや前ふ述多う江戸中の新理をいし隠し賣
 女をいし場所をいし拂ひとなりし大鴨をいし下志
 りをいし只志も前車の反意をいし後車の戒とあり
 舞がぬたをいし

おこしんらごー

是よりして世ふ思所と思し一坊家の感ある時の様を説く勅徳
の一端とある深川お移の娼婦の價昼夜十町目り五つ小切り
いき移所の子供をよる暇ありし移所も價目
く中裏の子供をよる暇ありし移所の價をよる暇ありし移所も價目
り移所もよる暇ありし移所の價をよる暇ありし移所も價目
矢合の裏の子供をよる暇ありし移所の價をよる暇ありし移所も價目
子供をよる暇ありし移所の價をよる暇ありし移所も價目
といふを細歩場と唱ふ裏の切見せり吉原ありつらう足
世といふ是より大新地の六大漢橋五明橋百安橋といふ之類の
揚屋ありし移所も大川より船舟きり二階見晴し善法美
あり娼女の裏の子供をよる暇ありし移所の價をよる暇ありし移所も價目
とお移所の子供をよる暇ありし移所の價をよる暇ありし移所も價目
吉原ありし移所の價をよる暇ありし移所の價をよる暇ありし移所も價目

燕の舟二程を渡りし
仲の舟
天保十二年四月廿八日

地は昼夜重き前後五六となる娼家四五軒ありし裏やらり移
つと同一仲所を初めその娼婦家の迎ひし移所も價目
舟宿を移所ありし移所の價をよる暇ありし移所の價をよる暇ありし移所も價目
移所の價をよる暇ありし移所の價をよる暇ありし移所も價目
田かきありし移所の價をよる暇ありし移所の價をよる暇ありし移所も價目
歌の飾り金品の品を用ひし移所の價をよる暇ありし移所の價をよる暇ありし移所も價目
史ありし移所の價をよる暇ありし移所の價をよる暇ありし移所も價目
つなきを根りし移所の價をよる暇ありし移所の價をよる暇ありし移所も價目
中より移所ありし移所の價をよる暇ありし移所の價をよる暇ありし移所も價目
とは年四月小令ありし移所の價をよる暇ありし移所の價をよる暇ありし移所も價目
河ひきと名づけし移所の價をよる暇ありし移所の價をよる暇ありし移所も價目
婦の衣装ありし移所の價をよる暇ありし移所の價をよる暇ありし移所も價目
裾まきし移所の價をよる暇ありし移所の價をよる暇ありし移所も價目

百文ある故曰ちらん世といふは世今人の世をたゞも昔の河岸通の
小茅葺の家のつく或三軒ありて船つき者をのり客を以て其
家ふりし人價をおもて百文のゆりの内を十六文斗りを納
て後せしむ娼家の僕を以てはお是の少く短うござりまるといひ
しうが客人は何家鴨でいへるまといひしと一説はこの佃町昔佃
町の猫油どもが佃の干場とせしまぬ佃の名有りて佃といふを
俗語をあやむといひあらむといふ箱の物語ありしは世あもき
ま見えあはせ船つき路ありまぬ一河川常盤所ふ揚屋四五軒ありて
の子供屋より鴨を娼婦の價擧下におおしき者もまは迎ひる茶
屋多し一本更由船荷所をむ俗あはけといふ家も切見をて娼女
のあはれもよかりしう文化年中争端のうりて後には茶軒並の水
茶屋ありて茶屋のうり落におおしき五文軒の娼家ありて内の子供
をて價常盤所ふゆ又一目糸天の門前ふし布を船を以ていふあり

こゝに五軒の娼家ありて至て徳傳ありてびんて落者もたしとて
らひ大書を禁ししをてて鴨をたきし中店を
よぶ子供屋裏ふりて鴨を價屋敷一もまか下切まあり
家の作り方娼家の似を狭くして風流の様には変を糸天と云松
井町ふ五文軒の娼家ありて子供の内ふりて價常盤所とおありて
いふ茶屋おちくお松糸天松井町におちくゆりて入江所ふ種の下とて
四軒とて子供内ふりて價は五六文ゆりて同くは迎はせ河長園所
吉園所の中よりいふ松とて切見世あは陸天長屋まを扱色くあり
吉園所ふ物屋を以ていふ有て四十軒ありの女の世あは眉を以て白髪
を以て吉園の鬘ふ結ひる扱を扱ありしと扱ありし木綿布ふ
おちくく昔もみりて成布して世あはをわけてけふまは月
物ふおちくく鴨ありといふまありしう知き此を情を考ふは
はあふりて教ふあはけが今もまありてあはけも昔もわたり襟ふ

白粉をゆり敷ハ為化粧して髪を裁^キをうけ古き天を着て
古き綿襦の二布あつても何里風俗者より價も百又二百文もな
り多くと稱す又天明の末近ハ大川中洲の沼永久稻のきり一舟^舟人
ぢうとて山船を掉さして岸をるるに往來の裾を引寄来る所
漕出しして中洲を下りるるを隈として價三十二文こと是れ
貯蓄者とおありて瘡毒を足腰のけりぬとの多しといふ是れ
思ひゆる事何り寛政五六の頃谷中の笠森稻荷を世に瘡を
と稱して諸瘡の平愈を祈願する多し一紙を掛し付ハ古の園
子を献^獻一紙成就して半の園子をまゝ門前の水菜屋を
借物をあつる系指の人を足す米の六のつくと唱ふる此水菜屋の娘
おせんといふ美人の因^因何り諸人ハ娘を足んとて群集し多し家
今ハ天皇とといふも亦ハ感應者といふ日蓮宗也門前ハ昔よりい
ろは系指とて五六兩の娼家何れ今ハありやして家も増

し娼婦の價ハ五六兩あり根津も七軒町より引る系指をあら^ら惣
門前内お側娼家連続著法堂をそと浴堂あとも系指を
あつて過多なるあり價も亦も五六兩あり切見世も何り又音羽町ハ
丁目九丁目ありしも今ハ表徴して終跡をまゝ見せり牛込若松
町ハ熟谷とて切見世何り赤坂御門ハ溜池の端ハ^キ飯とて娼家
表向裏向五六兩あり何れ價五六兩あり穂紋の捲衣ありとて表
飯をあつる店ありしが吉原深川を米と見立てまゝを惣し
たとといふ心を表といふは多し切見世あるは美あり麻布市
多角町の裏ハ谷ありや表ハ切見世の大^大廊あり同名居坂の下ハ
藪下とて切見世者ハ天保八九の頃有馬家の下郡と争論し
て絶つるも藪ヲ捲ふ切見世或は所何り多し表も表向裏向者ハ吉
田河おありそと田圃町ハ之ハ角とて娼家五六兩あり表飯
目^目切見世も何れ天明の頃より見世を五十兩と唱ふるも價も

燈を以て往來し腰掛の涼臺をあたふ茶店を出たりこれに近來の
事少く昔のありしに昔より日本橋通り本所通り堺所迄雪のつれ
町に裏表共僅の屋敷をもおしめて家屋建つて少しの屋敷構へ
きあもたりのをいふ文化二年三月四日午時輸出火文政十二年三月
廿五津田伏久野所の出火天保五年二月七日おあづ佐久野所の出火以て及の
近年は火災少く及の敷焼におあづて裏借倉の者もあつても市中をまの
き江戸端へ敷札して仮住居せしめて市中へ移らざる者も有り
夫よりて明地多のくある家屋も仮建おほく塗家瓦ぶきの坊主
ある定を失ひて世先へ屋を借せ丸を植ふこけら昔月の屋敷竹を
屋敷かざりあどしと隠者の庵を疑ひき商人見世有り端へいまも
繁昌して列して本所津川牛島のきあつと舟船合ふと寺社百姓
地の隅々町に住居をなかりあつと東叡山嶺の根岸村をといふ所の
後あれも火災の憂ありとそ百姓地へ町人住居をおくれ地代借賃

けを食ひ耕作の習をいふとそ田畑の家作して貸家とそ
事少くをなけり又細きえるの商人の表の見世を構へ大坂へ造を
あきて高札をあらふと是を倍ふ天道おしといひあつと昔もが風
雨を凌ぐんあふ掃屋といふものをあつらひて高ひりいふ文化六年
の頃津田の由花の火除地の表天の向より水尻の川端の川端まを
きあつくおつべきの掛席を補理ひなとて心算をいふと成乾りまよ
り年をゆるふとほひ掛席の裏に竈をもつきまて新築のり自由りて
倉敷あふ起臥きりそふあらひて江戸中の寺社門前やうひの栞柱あ
ふかの掛席懸垂作り出して住居をせ者とも町人の人別ふらむりて
を藉の人といひて市中の住べき人のゆるあふ住をを江戸中ふ
明地町店多きもむあり又下谷の池の端に新築のめをきぶき四季
の草あふを植す林の福のあつと水菜を料理屋を構へる
戦軍書津田津田理あつとありあふ住をを者ともあふいふ

新嘉文政三年之

天保七年六月廿五日同
秋、腹、テ、所、明、地、ノ、處
美、買、張、リ、掛、床、ヲ、取、掛、ハ
ヒ、テ、ル

無藉の人あり下さきもかゝる者其の爲業敗れ不害何ぞとて天
保十二年十月十八日荒赤の掛床足世一の中五掛ふ下と今さら
池のまゝ新ちまそはふ掛ふあゝ五さらひ花赤ささゝと終ふ
各毀ちまゝ是小墾きし江戸中寺社門前移積の掛床跡ら
五さらひとありまゝ又中野河川根岸何れも田畝を山崩して
建つらねし家並こゝろに五毀ちまゝの田畑とあり農民業を勤
し六當年五穀の收成他年小倍しは後何程の凶荒有とも憂と
甚とて人傳つる事の序小光一年の飢饉のみを説ん天保七年八
月諸國大風ありそ年五穀不熟して天下大飢饉と稱きこゝ
ありされば諸物の價高きなりて同八年凶荒赤の赤揚り百俵
小百拾五兩と限百の小白米四合より五合五夕とふありしは
此者難儀いふよりあり火附盜賊多しとて同八年三月十八日の
赤江戸中小火災九ヶ変あどとそりおさこしとそり大疫流

郷して人多く死を飢ふとて道路ふとをれ死を者喰つ
あ今もかゝる幾人といふ事を知らぬ市中の令は倒死の者のた
つふれを弁せしふとてき内仁ぬふよりあま廣山路神田依
久多所同鎌倉河原の赤救急を建て道路ふ迷ひ飢ふとてむ
とのまを入垂れ日ふ飯を賜り病者あり医薬を賜りしを窮
民喜び樂しむと限ありこれを町々の富豪の者ども粥を
持て飢ふ種し又我家進き何れりの空窮民小赤跡を何之など
せし飢を助ふる人数をえらばは付進由小空窮民蜂起して
富家小恥らうとてあど同えしとて江戸ハわをりの内仁ぬより
てくる鬮争をさうふあらば其翌年より豊熟打つきを世もや
と静ふなる多れと年凶の凶荒小赤を失ひし者ども乞ひの堂
ふりてらかゝこれけし小集り情賣飲酒をこゝし性善の人の
財物をかき其きい火をぬちなとて年小赤をさうかり

天保十四年三月廿七日江戸
市中人別御政 仰出并改
後人別送り書事者八人別
二如ハズ
天保十三年六月廿六日町送
場と唱し所同十二月迄三残
ラ大引掛フキ吉合ミラ

しも此方の内政令よりしてかゝるものも強きあつて捕らる一人
生國を改め元の由を領主とす——本國へ歸りて久しむる憂も
ともやぬとてき沖政とかくともまふつけとも先づいひ
せしを書つて他をいひ江戸小出で市中小住を有とも本國を
改め其村長より送るの志——書なきハことごとく元の村へ歸る
べし令らるる市中小住赤町道場と稱して寺院のごとく造り
なりて神佛を安置せしむる本寺中社を祀りて福しめを
又修験神祇の輩市中小住居をくゞてその所を新堀の岸と稱
ふと廣尾野ふ下橋つゝの倉を廻りて福を信しめぬふ湯島
天神の神明市ヶ谷八幡の境田小昔より宮堂居とてありしも
五拂堂又その所より揚る坊水菴倉あふ若き女を乞ふとて
令りて女とも紡績機あふと事とせしむる市中の家ごとふ
機柙の音響を幸はし給ふ坊とていふものも是をいひ禪のてりりき

ておらひしを極あられ法衣を著し経緯のさかふて叫化きり
程も市中の教諭おらたるとして衣履の緒細ふを織成綿
麻を限り餅菓を歎りの價貴き食物を極し家造りハ柙
飛丸定ぬる縁の杉戸障子等をとりぬ物事ハ市中候をわら
せし酒宴遊興遊藝を戒め志かを四民おとす業を勤め
曠者多シあつて遊民あつて家々富さるる戸々賑ふ昌きりこれハ丙丁
の厄年小所とも上ふ徳恤の内備あり下ふ儲蓄の餘西米
阿基ハ水旱飢荒もおとすふ多らば統げふ君らきの
御代茶々歳と祝し奉るふ

丁時明治十九年初冬

筆者

妻木頼徳



